



Atsuko Kudo Mail Magazine

229

2017.08.15 Leipzig

● 賛美の午後

● 間違いを繰り返さないために
～白バラ / ユーデンサウ～

お元気でいらっしゃいますか？

8月3日～6日にライブツィヒで開催された『第34回ヨーロッパ・キリスト者の集い』(Tsudoi34、主催：ミュンヘン日本語キリスト教会、テーマ：キリストが内に生きる)を、主の守りと大きな祝福のうちに終えることができました。皆さま、お祈りをありがとうございました！

今年は、ルター宗教改革500年を記念して開催された特別な集いであったため、欧州内外から340名もの参加がありました。私は、4日トーマス教会で行われた「賛美の午後」と、分科会「バッハ・信仰の音楽～ムシカ・ポエティカ」で奉仕させていただきました。

集い終了後は、日本から参加された二人の姉妹とドレスデン、ヴィッテンベルクを訪れました。その訪問も含めて、皆さんに報告させていただきます。

賛美の午後

8月4日(金)、バッハが長年カントールを務めたトーマス教会をお借りして、「賛美の午後」(賛美礼拝)の時を持つことが出来たことは大きな喜びでした。準備は2年前から始まりました。

2008年、ルターの宗教改革の発祥地となったヴィッテンベルクでTsudoi25が開催されました。そこで、私たちはルターが1517年に「95か条の提題」を打ち付けた城教会で礼拝を持たせていただいたのですが、その礼拝のために、急遽12名によるグナーデン・アンサンブルを結成し、宗教改革時代の賛美をささげました。

今年のプログラムは、あの時に賛美したモテット(合唱曲)から、ハインリッヒ・シュッツ Heinrich Schütz の「それ神は世を愛し」(ヨハネ3:16)と、ヨハン・ワルター Johann Walter の「主のことばのみが」を入れる予定を立て、かねてから参加を考えて来られた活水聖書学院の聖歌隊の皆さん(15名)が、2年間の練習を積んで日本から参加してくださったのです。

また、ライブツィヒの音大で教会音楽を学ばれ、8月からライブツィヒ近郊の町の教会にカントールとして就任された指揮者の小山田薫さんが、実に的確な合唱指導をしてくださいました。おかげで、3回の練習で難しい合唱賛美がまとまり、60名以上の聖歌隊、器楽の方々を合

わせると総勢70名で、声と音をひとつにして賛美をささげることができました。写真：小山田薫さん(真ん中)、ハンブルク日本語キリスト教会の井野葉由美先生(右)と。小山田さんは、ハンブルク時代、ハンブルク日本語教会を通じて信仰告白に導かれました。



「賛美の午後」では、オルガンによる前奏、間奏、後奏、デュエット、ミラノ賛美教会の内村伸之牧師より「はじめの愛に戻れ」と題して語られたメッセージ、会衆賛美によるプログラム全体に聖なる神を感じ、キリストのみからだの共同体として、真心からの「礼拝」をささげさせていただいたのではないかと思います。

以下、分科会で用いた「賛美の午後」のプログラムノートです。オルガン曲や合唱曲の詳しい説明は他の講師の先生方お願いしたので、説明文が不足している曲もありますが、興味のある方は、どうぞ、次のリンクを開いてお読みください。

また、集いのスライドショーと、神戸ルーテル神学校からお越しくださった橋本昭夫師の宗教改革特別講演の原稿を、以下のサイトからご覧になることができます。

間違いを繰り返さないために

集いの後、ライブツィヒから一時間半の距離にあるドレスデンに行きました。目的は、シュッツがカントールを務めた聖十字架教会 St. Kreuzkirche を訪問することでした。聖十字架教会は、2005 年に修復が完成した絢爛豪華な聖母教会 Frauenkirche とは対照的な、外観も内装もあてやかさからはかけ離れた造りでしたが、その名の通り、十字架の主を感じさせてくれる教会でした。教会内は写真撮影が禁止されていたので、外観しか写真に収めることが出来ませんでした。入り口の左側の小部屋で、ゾフィー・ショルらによる地下組織「白バラ」Weiße Rose の展示会がありました。



当時、ミュンヘン大学の学生であったゾフィー・ショル Sophie Scholl、ハンス・ショル Hans Scholl 兄弟は、クリストフ・プローブスト Christoph Probst らと反ナチス抵抗運動「白バラ」のメンバーとして抗議ビラを配るようになりました。しかし、余った最後のビラをミュンヘン大学の構内で撒いたのが大学のナチ職員に見つかってしまい、斬首刑に処せられました。

彼らは、聖書の教えに従って生きようと試み、ナチスに勇敢に立ち向かったクリスチャンの若者です。今、彼らの働きはドイツ内外で称賛され、ミュンヘンのみならず、ドイツの多くの町の通りには、シオル兄弟 Geschwister Scholl の名前が付けられています。また、ドイツ国内の学校で最も多い名前は、シオル兄弟学校 Geschwister Scholl Schule です。



「間違いを繰り返さないために」、歴史を覚え、ナチスの悲惨な行為を覚えて抵抗者たちの名前を町や学校に刻んで行くことには、大きな意味があると思います。

彼らのことは映画にもなりました。「白バラは死なず」(1982)、「最後の5日間」(1982)、「白バラの祈り〜ゾフィー・ショル 最後の日々〜」(2005)です。映画の中で、ショル兄弟が処刑される日、面会に行った両親が「私たちはお前たちのことを誇りに思う」と語ったことばに、私は深い感銘を受けました。Scholl 家の家族は皆、暗闇の力が覆うドイツで、神のみこころを求めて生きた人たちだったのです。

～ユーデンサウ～

宗教改革 500 年を迎えるルターの町、ヴィッテンベルクの市教会の壁には、ユーデンサウ Judensau（「ユダヤ人の豚」、ドイツ語でユーデンはユダヤ人、サウは豚）のレリーフがあります。ユーデンサウとその下の記念碑に関しては、2009 年に発行したメルマガ 136 号に記事を書きましたので、どうぞ下のリンクを開いてお読みください。

<https://www.dropbox.com/s/q510v305qqzd9fz/136.20090212.pdf?dl=0>



今回のヴィッテンベルク訪問の目的のひとつは、このユーデンサウの前で祈りをささげることでした。私が加わっている祈りのグループでは、宗教改革 500 年記念を祝うにあたり、ヴィッテンベルク市教会から、このレリーフが取り除かれることを願い祈ってきました。

ユーデンサウは、ユダヤ人迫害が広まった 13 世紀から 15 世紀にかけて、ユダヤ人を侮辱し嘲笑するために、欧州各国の町の目立つ場所に掲げられるようになりました。ドイツでは、今も 32 の町にユーデンサウが残されています。

ルターの町、ヴィッテンベルクのユーデンサウは、その中でも甚だしくひどいものです。豚からユダヤ人の子どもたちが乳を飲んでいるだけでなく、左側ではひとりのラビが豚の尻尾をめぐり、その下にはトローラーが置かれています。そして、もっと冒涇的なのは、その上にユダヤ人が口にすることも許されていない神の聖名が書かれていることです。これは、8 年前の訪問時には気付いていないことでした。

神の約束の民であるユダヤ人だけでなく、神の御名さえも冒涇されているこのレリーフが、聖なる神がご臨在くださる教会から一日も早く取り除かれることを心から願っています。その上で、別の場所にこのレリーフを保管して、「間違いを繰り返さないために」、覚えて行く必要があると思っています。

お知らせとお祈りのお願い

○ 大きなニュースがあります。高齢の父と知的障害の妹のことを考え、来年の 5 月か 6 月頃に本帰国することになりました。帰国後は、本拠地を事務所のある大阪に置き、夏や冬の活動の少ない時期を札幌の実家で、また定期的に短期間の里帰りを考えています。来年で 35 年になるヨーロッパ生活に終止符を打つのは残念な思いで一杯ですが、主の導きであると確信しています。帰国に向けてたくさんの準備がありますので、どうぞお祈りください。

○ 10 月からのコンサートの準備のためにお祈りください。

○ 忙しい時が続きますが、時間の許される限り、聖書の学びも続けて行けますように。

主イエス・キリストの恵みが、

皆さまとともに

ありますように！

Atsuko Kudo

